夏のつづき

童神　一心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏のつづき

【Ｎコード】
Ｎ４４８６Ｄ

【作者名】
童神　一心

【あらすじ】
―昭和４３年の初夏、夏祭りのその日。僕らは【禁忌】を犯した……―何事もない平和な日常が、少しずつ、歪んでゆく。

序章（前書き）

作中に血、暴力または、残酷な表現があります。
これらに不快感を覚える方はご覧になる事をお勧めしません。

序章

―昭和３２年　初夏

夏の夕暮れ。空は、ほんのりと薄暗い夜の色へと染まってゆく。
時折、吹く風は昼間のような熱さはなく、ただ、生ぬるい。
一人とぼとぼと歩く、田んぼ沿いの、でこぼこした畦道には、ヒョロリとした電柱が数本立っているだけで、人が通る気配はまるでない。
辺りはすでに暗く、見上げた空に月が浮かんでいた。

ふと足下を見てみると、長く伸びた自分の影が夜の闇へと溶け込んでいた。
踏み出す自分の一歩先はまるで、別世界へと繋がっているんじゃないのか、とか、変な事ばかり考えてしまう。
頼りの電柱は、夜道に薄気味悪いスポットライトをつくり、時々、ジジっと音を立てながら点いたり、消えたりを繰り返している。
それは逆に恐怖心を煽るだけで何の役にも立たなかった。
はぁ…、と溜め息をつきながら足早にその場を立ち去る。

もちろん、いつもはこんな道を通ったりなんかしないのだが、今日は特別だった。
急いで向かわなければならないところがあったので近道をしたのだ。
なにせ今日は、年に一度の夏祭りがあるからだ。

もう少し進んで行くと、きっと祭囃子の笛の音や、太鼓の音に、騒ぐ人々の楽しげな声が聞こえてくるだろう。
それに、遅刻した自分を待っている友人たちがいるはずだ。
だから私は急がなければならない。少しでも早く、彼らに合いたいから。
遅刻した言い訳を考えながら、走りだす。

残された宵闇に、寂しそうにひぐらしがカナカナ…と鳴いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4486d/

夏のつづき

2010年11月3日13時54分発行